

～企業コミュニケーションの価値を多面的に高める「場」～

日本には企業博物館が全国に1000はあるとみられています。企業博物館を立ち上げ自ら館長を務めた粟津重光さんが、全国200か所近くの企業博物館の訪問で見出したコミュニケーション価値を、あますところなく伝えます。

**永守コレクションギャラリー
(登録博物館)**

〒617-0003

京都府向日市森本町東ノ口1番地1ニデックパーク

<https://nagamori-gallery.org/>

開館日：月・火・木・金曜日

開館時間：10：00～16：00

入館料：無料

来館にはネット予約が必要。HPを利用して予約手続きをすること。

【この連載について】

この連載は基本的に Corporate museum に分類される企業博物館を取り上げているが、企業博物館とされるものには Company museum という分類も存在する。1980年代アメリカで規定されたもので、企業のオーナーなどが自身で所有する絵画、彫刻作品などの披露のために開設した施設である。原則としこちらは取り上げてこなかった。しかし「永守コレクションギャラリー」は創業者の個人コレクションから始まったものの、訪問、ヒアリングを通して Corporate museum の機能を十分に備えていると判断したので取り上げることとした。理由は本文中で記載する。

【館内】

- ① エントランス ② オートマタの世界 ③ オルゴールの種類と歴史 ④ コレクション収蔵室
⑤ マイスター工房 ⑥ 鑑賞ラウンジ ⑦ オルゴールショーケース

エントランス

オルゴールやオートマタ(カラクリ人形)、自動演奏ピアノなどギャラリーの中身を紹介。

オートマタの世界

オートマタの世界の入り口では手回しオルガ

ンの実演が見られた。驚くのは微妙なトレモロ(音楽用語=ゆらめく)まで忠実に再現された、精巧な作りだ。また、オルゴールという言葉は日本語で、オルガンという言葉から派生したらしいとのこと。海外では music box 等の呼び名がある。さらに各種のオートマタ(主に19世紀から20世紀にかけてヨーロッパ等で作られた機械人形ないしは自動人形)が紹介される。

オルゴールの種類と歴史

1850年代のスイス製オルゴールの分解展示やカリヨンクロック、懐中時計などの希少資料を交えて、オルゴールの種類と歴史を紹介している。

コレクション収蔵室

365日24時間、空調管理を行い、資料に最適な環境が保たれている。ガラス張りの室内は、見せる収蔵室としてコレクションが整然と並べられている。

マイスター工房

専属のオルゴールエンジニアによるコレクションの整備修復作業の他、新たなオルゴールやオートマタ作品についての研究開発が行われている。ガラス越しにその作業風景がみえる。

鑑賞ラウンジ

オルゴールや蓄音機、自動演奏ピアノなどが並んでおり、実に見事なコレクション。バラエティに富んだ、選りすぐりの機器でコンサート形式を楽しめる。

オルゴールショーケース

京都の伝統工芸作家とのコラボレーション作品やデジタル技術を駆使したオルゴールなど、国内で製造された最新作品を紹介している。

NIDEC グループ創業者・永守重信氏の個人コレクションからスタートしたこれらのコレクションは見事なものである。2016年2月、永守氏はオルゴール文化とその関連技術の歴史的、社会的価値を紹介する施設の運営母体として永守文化記念財団を設立した。永守氏は幼少時からオルゴールを好んでいたようだ。長じては自身のコレクションとしてオルゴールを購入したが、作品の体系的な管理が必要だと考え、個人管理では限界があったため、財団法人を設立して管理を移行した。現在は公益財団法人が永守コレクションギャラリーを管理・運営し、アンティークオルゴールの収集もおこなっている。

その時代を代表する商品、歴史を回顧するうえで欠かせないものが見事に集められている。

この施設は2023年3月に、オルゴールの文化と関連技術を継承していくための施設として開館したが、博物館登録審査の結果、基準を満たす博物館施設として正式に登録された。

「栗津の視点=見どころ」

NIDEC グループにはニデックインスツルメンツ株式会社があるが、旧社名は三協精機株式会社。もともとオルゴールを祖業とするメーカーであった。M&Aを経て日本電産グループに入り、現在扱っている製品はモータ、モータ駆動ユニット、カードリーダー、産業用ロボット、プラスチック成形品と多様化している一方、オルゴールの開発・製造・販売も継続している。これは永守代表の考え方の反映であるが、新た



新たな提案の「オルフェウス^{ちゆうほうぎれ}重宝裂オルガニート」(筆者撮影)

伝統工芸の一つ、西陣織の技術の粋を集めた織物であり、祇園祭をはじめ様々な祭礼や宮内庁御用達の品、舞台の緞帳にも使われている「重宝裂」を用いたオルガニート(カード式手回しオルガン)。観て聴いてインテリアとしても楽しめる新たな日本のオルガニートの提案。

な市場の開発、新たな商品展開をおこない新しいオルゴールを創造していく方向を打ち出した。ショーケースには未来型オルゴールを紹介する展示など、オルゴールメーカー時代から培ってきた技術を活かした新たな提案がある。

またヒアリング時理解したのだが、ニデックインスツルメンツはNIDECグループの中で数少ないBtoCビジネスを展開する企業であり、多様なステークホルダーとNIDECグループを結び付ける窓口の一つとして機能しているのがこの永守コレクションギャラリーなのだということも理解できた。オルゴールショーケースで、画像で紹介した以外にも数々の斬新な提案が見えた。企業博物館としてこれまでに存在しなかった役割を果たしていこうとする気概がこの施設の見学から感じられた。